

## 主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

言（ことば）は、自分の民のところへ来た



あらためて主の降誕おめでとうございます。日中のミサの典礼です。朗読はヨハネ福音書の1章です。朗読の中に馬小屋も飼い葉桶も乳飲み子も見当たりません。司祭になって最初の10年、「いったいこの朗読からどのようにご降誕を解き明かせばよいのだろうか」と考えました。

しかし今、解き明かしは「肉となってくださった言（ことば）」が必ず実行してくださると考えています。朗読箇所に躊躇があるとしたら、すぐに答えを求めようとしている司祭の方に、説教しなければと焦っている司祭の方に原因があるのです。

夜半のミサでも触れたのですが、昨年は御子様を助祭に渡してから馬小屋の飼い葉桶に安置してもらいました。それはもう、新生児を母親にそっと抱かせる、そう言っても良いほどでした。助祭であった洪師が、主任司祭から慎重に御子様を受け取ったのをはっきり覚えています。

ここで本日の朗読から目に留まった箇所があります。それは「言は、自分の民のところへ来た（が）」です。ただ皆さんもすぐにお気づきだと思いますが、来たには来ましたが、民は受け入れなかつたとあります。「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかつた。」（1・11）

なぜ、受け入れることができなかつたのでしょうか。それは、民のほとんどが、「こうであってほしい」という色眼鏡で、言（ことば）に接したからです。何が足りなかつたのか。少し考えてみましょう。

中田神父は、今日までに初雪が降ってくれたらなあと、切に願っていました。雪を手に取る感覚をたとえにして、話を進めたかったからです。しかし雪が降りそうな気配は少しもありませんでした。もし雪が降って、それを手に乗せるとしたら、皆さんはどうにするでしょうか。

きっと、手のひらにそっと乗せるはずです。決してこちらから手を振り回すのではなく、降りてくる雪を、そっと受けとめるはずです。それは、「言は、自分の民のところへ来た」この肉となってくださった言（ことば）を受けとめるしぐさそのものなのです。

私たちのもとへ来てくださったみことばであるイエス様を、ただ受けとめる。手を振り回すのではなく、そっと受けとめる。こうして初めて、肉となってくださった言（ことば）を、迎えることができるので。 「こうであってほしい」といった色眼鏡ではなく、みことばであるイエス・キリストが降りてきてくださるのをそのまま受け取る。その時私たちは「自分を受け入れた人」「その名を信じる人々」となり、「神の子となる資格」が与えられるのです。

肉となった言（ことば）であるイエス・キリストは、人知れず、そっと降りて来てくださいました。受け取る準備、受けとめる準備が出来ているでしょうか。「肉の欲」は、何か要求しようとします。おいでくださった言（ことば）に、全面的に心を開きましょう。その時私たちは「父の独り子としての栄光」を知り、恵みと真理に満たされるのです。

聖家族（マタイ 2:13-15,19-23）

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。